縹緲たる虚空-津田洋行先生を送る-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2013-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 義雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/13941

縹緲たる虚空――津田洋行先生を送る――

佐藤義雄

某日、学生がやってきて、津田先生は何と戦っているのでしょうという。聞くと先生が時折見せるポーズ、額に手をやって何か見えざる敵から身を護るかのような仕種が一体何を意味するか、学生たちの評判を呼んでいるという。講義内容よりこういう〈パフォーマンス〉に関心が動いていくのが学生の通例だから、癖なんていちいち判りはしないよと言って相手にはしなかったが、長いお付き合いの中で様々な〈癖〉を見せてくれた先生の〈パフォーマンス〉のなかで、確かにこれはとりわけて何か意味ありげなそれであった。

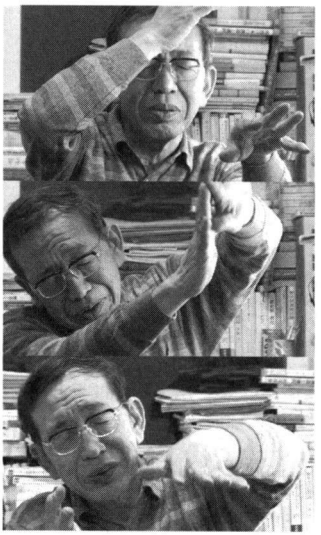
世事にからんでのやるせない思いは津田先生と共有してきたものだから、そのレベルなら私にもよく了解できることなのだが、むろんそういったことがらではなかっただろう。というか、世事を世事として処理しなければならないのが、いつの間にか私がとらされてしまった専攻内の〈立場〉だが、できることなら私も時折先生が口にされる〈受難（パッション）〉に沈潜してしまいたいと思う時も少なからずあった。とても私には無理であったが……。

いやいや、あのポーズはもうちょっと別のことであったのかもしれない。若いころから深かった眉間のしわは年々さらに深くなって来られたが、押し寄せる様々な観念（というより「情念」と言ったほうが近い）それを懸命に整理しようとする仕種だったのかもしれない。先生は日ごろ「文学」への倦厭感を学生を前に口にし（さすがに私には遠慮されていたが）、「思想」的立場を公言しておられ、それはまた「精神史」を重要な核の一つとし

ているこの専攻の伝統を守っていただくということでもあったが、「文学」といい「思想」といい先生にとっては二分できるものではなかったはずである。これを「文学」といいこれを「思想」とするというような領域をはるかに超えて、縹緲たる「世界」の構築に向けて津田先生は思念を傾けておられたのである。

めったにお書きにならない論文もほとんど破格なものであって、その内容も文体も、押し寄せてくるさまざまな情念がほとばしってしまうような激越なものに終始された。〈ドンキホーテ〉と評する向きもあったが、〈論文〉などというものは先生の情念を盛る器として、不足であったということだと思う。大学に籍を置く限り仕方のないことだが、〈学会〉や〈業績〉に現を抜かすしかない現状へのもどかしさも眉間のしわを深めてしまった一因であったろうと推察される。

混沌縹緲の先生の情念世界の全体像は到底私の理解の及ぶところではない。ただ、結局は「悲しき玩具」であったとしても、先生にとっては、最も身にあったものが短歌であったようだ。文芸学専攻は野毛・津田両先生のご退職と「文芸学専攻」の終焉を機に『回想・文芸学専攻——懐旧と哀惜と——』をまとめ両先生へのはなむけともしたが、そこに先生が「自選詠草」として載せられた何首かを引き私注を打ちながら、私にとっての先生の人となりを懐かしみたい。



『回想・文芸学専攻』栞
（市田印刷出版　2010）より

函館の雪降る港を出る船の汽笛を想ふ雪降る夕べ
函館の阿Qといふ名の居酒屋に老酒飲みしもはるかな
昔

大学卒業後十五年間高校教師を務められた。初任地は函館ラサール高校。先生は学部では中国文学を学ばれ魯迅などをお読みになられた。東京都立大学の中国文学教

室が最も華やかな頃であった。なぜ函館まで行かれたかついつい聞きそびれてしまった。お若かった日々、先生のやや遅く訪れた青春は函館の記憶と強く結びついておられるようだ。そういう終世の〈場〉を持つことができるというのは幸せなことだ。啄木はあまりお好きではないはずだが、先生のロマンティシズムは北方のそれでなくてはならない。

幽黙(ユーモア)も韜晦もなきわが直情をなだめすかして井伏を読
　みぬ

古書店に村上一郎ほこり浴び可哀さうなれば買つて帰
　れり

井伏鱒二と村上一郎という組み合わせがいかにも津田先生という趣である。「可哀さう」ということばの中に、思想もまた表層の〈流行〉でしかない世の中への穏やかな憤懣と、硬質な村上一郎への静かな共感が隠されている。芥川龍之介も太宰治もお好きな作家ではなかったが、芥川龍之介の中では「蜜柑」を、太宰治の中では「満願」を最も愛しておられた。志賀直哉でいえば「赤西蠣太」。井伏文学では、特に「へんろう宿」を「神品」と評しておられた。漱石文学への評価の一方に、こういう〈好み〉を持っておられ、私もまた共感するところが多かった。

「直情」とは文字通り、打算や衒いに歪まないまっすぐな心。決して社交的とはいいかねる先生と、性格としてはだいぶ相違のある私だが、妙に気の合うことが多かったのは、屈折に屈折を重ねる近代文学の中に、まっすぐなものを求めたいという思いを共に抱いていたからかもしれない。時に余りにもの「直情」に悩まされることもあったが（教室では柳田国男の白足袋事件が有名であった。前記『回想・文芸学専攻――懐旧と哀惜と――』）。

捜せども書架に見えざるわが「パンセ」あのパスカル
　氏がさては隠したな

「雪女」読みて雪降る夜なれば向かふより来る美女お
　ほ怖き

確かに「韜晦」は先生とは縁のない世界であったが、奇を衒わない、まっすぐで巧まない上質な「幽黙」は、めったにないだけに、まれに見せるそれは絶品であり、何度和ませていただいたか。ほとんど性癖と化した感も漂う、暗欝な〈受難〉と混沌としたまま襲来する〈情

念〉の切迫の中で、時に〈パスカル氏〉と戯れ、時に美女〈雪女〉の妄想に遊ぶ、そんな先生を想像することは楽しい。

女子学生の呉れし林檎を秋の陽の机に置けば香りただよふ

本に埋もれてドアから机までかろうじて細い一本の通路しかない、そんな研究室の机上にちょっと先生には似合わなそうな花が飾られていたことがあった。時にぬいぐるみであることもあった。花はしばしば萎れたままでもあったが、歌としてはやはり〈林檎〉がいい。こういう光景は私個人としては、中山和子先生の記憶と結びついている。中山先生は「佐藤さん見た？」と興味しんしんといった趣であった。その興に誘われて、一体何事かとあれこれ推量したことを懐かしく思い出す。生え抜きであるにもかかわらず（あるいはそれゆえに）、文学部最初の女性教員中山先生は、日本文学専攻の専攻事情のなかで苦労が多かった。明治大学文学部の赫々たる日本近代文学研究の流れの中で、〈偉大なる暗闇〉ふうで何も書かない津田先生、一向に学会に顔も出さず論文も書かない若い新任教員佐藤義雄、こういったメンバーの中でリーダー中山先生は相当にいらいらしたはずだが、しかし同時に津田先生や私の人柄はそれとしてお認めくださり、楽しんでくださりもした。津田先生と女子学生というテーマは、私の中ではかつての日々へのこんな回想につながっていく。

春眠より覚めたる河馬はどどどおつと淀む春水を溢れさせたり

朝日歌壇二〇〇九・五・二五付で四人の選者全員から星印をとった作品。津田先生の代表作だろう。「河馬二トン春水二トン動かせり」という別の方の投稿句の本歌取りで、津田先生の案外なご器用ぶりを見せてくださったもの。めったにない全星印の傑作に、「生の躍動を伝えて迫力満点、と明るさ・元気が評価を得た」などと長い紹介がついた。社会詠であろうが自然詠であろうが、先生には常に〈内部生命〉的なものが流れておられたように思う。この〈内部生命〉的なものはナイーブなものだから一切の俗世間的なものとは接合できない。しかし決して反ないし非社会的であるということはない。むし

ろ社会的なものと強く結びつこうとする。〈内部生命〉が理念としての〈社会〉と結合しようとし、しかし、理念としての〈社会〉と現実的な〈社会〉との差異に苦い思いをするしかないというのは透谷の構図で、若い日々、透谷に明け暮れしたのは当然のことであっただろうと思う。

都立立川高校の高校生のころ新聞部に在籍し、大学卒業後新聞記者をめざされた（先生にとっても幸せなことに！迎え入れられることはなかったが）、その〈三つ子の魂〉は形を変え流れ続けているご様子である。「阿修羅の目澄む興福寺にアフガンの平和を祈る絵馬掛かりをり」というような名歌もある。こういういわば透谷へと向かう志向は、ここ数年は横井小楠の〈未発の可能性〉に向かっておられるようである。そのアウトラインあるいは序論は、「東アジア的近代への道　横井小楠の思想的可能性」としてすでにまとめておられるが（佐藤・恒川編『近代への架橋』蒼丘書林、二〇〇五）、学生指導に費やす時間も不要になった今、ぜひ「どどどおつと」進めていただきたいと切に思う。

菜の花の黄金の道を佐保姫の駆けるが見ゆる房総の春

林には木の実熟して栗鼠もゐてカリコリカリと秋を狩りをり

こういう自然詠もある。こういう歌は私の〈私注〉の及ぶところではないが、〈実相感入〉といった、専門歌人のなんだか難しそうなそれとはだいぶ違うようだということくらいはわかる。好きな歌人は牧水であるようで、そんなところもあるかもしれないが、やはりちょっと違うようにも思う。浪漫的な想像力、可憐なものへの愛着、そんな言葉が浮かび出るが、見当はずれかも知れない。こういう歌も挙げたのは、これもまた先生の世界であった（ある）と言いたかっただけのことである。重厚暗欝な社会詠・思想詠と、全体的には軽やかで明るい自然詠との共存という構図が妙である。先生に〈重厚暗欝〉しか見ないのは明らかに片手落ちである。

昨年出した『文学の風景　都市の風景』をことのほか喜んでくださったのが、中山先生と津田先生であった。お二人の先生が喜んでくださったことが、私にとっては嬉しいかぎりであった。津田さんも喜んでいるようですよと中山先生のお便りにあった。なかなか書きたがらな

かった津田先生が、率先して書評を書いてくださった。すばらしいものだったが、最後に、「「文芸メディア」という新専攻の進むべき道を明示したひとつの成果」と津田先生らしからぬ（？）気遣いを見せてくださっていた。文学科の専攻であるにもかかわらず、〈メディア〉ばかりにシフトさせようとする動き、「日本近代文学研究」は日本文学専攻で充分という動き、その中で苦しんできた私への密かな応援でもあり、文芸メディア専攻への先生の思いも託されているのだが、先生、ありがとうございました。でも、大丈夫です。専攻も私も、〈伝統を現代に生かす〉という構想の〈文芸メディア〉を貫くだけですから。

四国・九州への横井小楠や徳冨蘆花を求めての〈研究〉の旅、八王子川口、透谷「三日幻境」の里歩き、旧文芸学専攻の先生たちと歩いた小石川街歩き、さまざまな思い出がよみがえります。〈卒業〉されるとなかなか機会も作れないでしょうが、できないということでもないでしょう。それには健康が条件、どうぞご大切に。横井小楠研究のご進展心より願っております。